

欧州フーフとびある記

富山市民病院五福分院 長谷田 祐 作

第 1 信

会員の皆様お元気ですか。

私は今、社会福祉が地球上で最も進んでいるといわれる国の一つ、スウェーデンへ来て居ります。揺りかごから墓場まで何の心配もなく暮してゆけるというスウェーデンはストックホルムに居ります。もっと詳しく言うと同地のカロリンスカ病院の講義室で説明を聞いている処です。

去る7月6日午前10時50分に羽田を出発、モスクワ経由コペンハーゲンに着いたのは同日のまだ明るい夕刻。飛行時間は合計で約13時間になりますが時差の関係で午後5時（現地時間）を一寸廻った処なのです。何となく身体の調子が変わるのですが（それもそのはず、日本に居れば真夜中になるのですから）、それでも当日は9時過ぎに就寝、翌7日には同行の数人が第13回国際整形外科学会に出席、私達も会場へ同行致しました。会場前には万国旗が立てられ、会場前広場にはズラリ自家用車の列。なかなかの壮観でした。

同日の午後には州立病院を見学致しましたがその翌日にコペンハーゲンを発ち、ストックホルムに着いて一泊、今朝この病院を訪問したという次第です。

この病院は唯一つの国立病院だそうです、今から数年前に、州立であったものを国が買上げたとのこと、現在病床数は1,700、入院、外来合計で昨年一年間に50万をこす患者が利用したそうです。

もう夏期休暇に入っているため病院の主だった Staff は休暇を取って不在、PR担当

の事務職員の説明では予算が毎年9月に決められる。今年1年の総予算は下記のようなも

1950年度予算	
総 計	4億5,000万クローナ
内 訳	
人 件 費	3億3,000万クローナ
医 療 薬 材	6,500万クローナ
建 築 関 係	5,500万クローナ

のだそうです。人件費が7割以上を占めている点に御注目下さい。医療国営という経営形態の違いだけでは片付けられないようです。

また昨年一年間について見ると患者（入院、外来合計して）一人あたり950クローナのサービスがなされていることになるんだと鼻高だかの態でした。一人あたりどれだけのサービスをしているかが自慢の種になるとは流石。どこかの国の関係者によく知っておいてもらいたいもの。

看護要員などは下記のような状態でしたが、それでもなお手不足を訴えていました。

看 護 婦	820人
準 看 護 婦	400人
準看護婦の 助 手	820人

医師は400名勤務していますが勿論足りなくて困っている由。

これから病院の一部、リハビリテーション関係と小児病棟を案内することなので、今日はこれにて失礼することに致します。では又。（1クローナは日本円換算約70円）

第 2 信

皆様その後、お変わりありませんか。

スウェーデンの国立病院を廻って、翌日にはノルウェーへ。ここではオスロ市立病院を訪問の予定で今回の旅行への期待の一つであったのですが、休暇のため十分な案内・説明ができないからという理由で玄関払いをくれました。ここヨーロッパでは6月下旬から8月末日まで交替で夏期休暇というわけなのでこれから先が思いやられるというものです。

ノルウェーのオスロを発ったのは7月12日、オランダ経由でロンドン着が13日、翌14日は私達の目的たる第9回国際化学療法学会議に顔を出し15日には汽車でロンドン出発、カレーより船でドーバー海峡を横断の運びとなりました。ここは皆様御存知のように潮流の関係から海が荒れるので有名な場所です。

天候はまことに良かったのですが一同やはりグロッキー。私は何となく三半規管に欠陥があるのでは？と冷やかされる始末。

再び汽車に乗り換えフランスの農村地帯を横切って花の都パリに着いたのは同日の夕刻5時30分でした。

一夜明けて今日は16日快晴。オテル・デュ(病院)などを視察致しました。

さて「パリの何処を見ても過去が生きている」と言った人がいるとか。

モンマルトルの丘、ムーラン・ルージュ、コンコルド広場、シャンゼリゼ大通り、ルーブル宮殿(美術館)、凱旋門、エッフェル塔、ノートルダム大寺院、すべて歴史に名高いものです。そしてセーヌの流れ。

しかし私が何よりも感じたのは実践的都市計画。都市計画の教科書的存在という点でした。都市計画の歴史と現実。公衆衛生学に見る都市計画のすべてが此処に生きているという感じです。ただし、私達が耳目にするのは勿論欧(米)的都市計画、何といっても都市らしい都市というのは欧(米)的であり、その実情に添った計画がなされてきたことは

当然といえます。

日本のように都市造りはこれからといってよいような地域では欧(米)的都市計画をそのまま真似る必要はなく、他山の石としての考え方に立ち、日本独自の都市計画というものが考えられ行なわれてもよいのではないだろうかというのが私の結論でした。

次の日早朝、何か音がするので窓から眺めますとナント塵埃収集車。作業員が、これはまた真赤な、ハンテン式のユニホーム？を身につけ作業しているのでした。珍らしくてフィルムに収めてみましたが、うまく写っていませんら供覧致したいと存じます。

パリの街頭では、通りが汚れますと黒人の作業員が何処からともなく現われ掃除をして行くのを思い合せ、これらはバリーで感心したことの一つでした。

18日にはスペイン(マドリッド)へ発ちます。では又、さようなら。

第 3 信

皆様その後、如何お過ごしですか。

都の中の都、パリから荒涼という感じのスペインへ。ここでは旧都トレドなど訪問、21日はイタリアのローマへ。そしてかの有名なカタコンベ(地下共同墓地)に参拝、翌日にはナポリ、ポンペイを一巡、そしてオーストリアのウィーンへ着いたのは昨日(24日)でした。

今日はウィーン大学の医学部を訪問致しましたが、ここで度胆を抜かれたのは20階近くの職員宿舎でした。内部は勿論冷暖房完備、居住性抜群という話です。これと向かい合って看護学校(宿舎つき)が、これも10数階のビルで同様の設備が整っているとのことでした。

当医学部では著名な教授が多いということで案内の人も自慢気でしたが、ゼンメルワイスなどもその中の一人です。

看護学校へは韓国から10数名の留学生が派遣されてきているそうです。隣りに日本とい

う国があるのに……。

ウィーンは音楽の都、今晚も郊外の一屋にてワルツで夜を明かそうとの催しがあり、同行中元気ある数名が参加したようです。私は当初の予定通り、明日同行の諸氏と別れモスクワ経由で日本へ帰ることになって居り残念ながら失礼することに致しました。街はドナウ河畔、森あり坂あり、何となく金沢市を想い出させます。空模様も何か雨もよいです。寒い感じです。

さて生まれて初めての欧州旅行を現実に体験して得られたものは一体何であったか。本業（医学）に関するものは別。強く印象づけられたことは御当地ヨーロッパでは元来人を大切にすること、自分を大切にすると同時に他人をも大切に、人間を大切にすることから自然を大切に。勿論国により表現や行動はさまざまに変わりますが基盤として

存在しているのはこのような考え方のように見受けられました。これが実体かどうかは何れまたゆっくりと再度渡欧して確かめて見たいもの。

その他の印象

デンマーク……ビスケット（乳菓）の味

ノルウェー……地理の勉強フィヨルド

オランダ……水車とダイヤ

ロンドン……空港の差別（？）待遇

マドリッド……闘牛はと殺の儀式化

ローマ……遺跡の陳列場

では、お粗末な便りでまことに恐縮でした。

追記 今回の旅行には金沢医科大学老年病科関本教授及び教室員各位の御尽力をみなみならぬものがあつたことを附記し衷心より謝意を表する次第です。